

2025年 6 月 9日

資料館通信 第86号

ふじみ野市立 上福岡歴史民俗資料館
大井郷土資料館

埼玉県ふじみ野市長宮 1 - 2 - 11 TEL 049-261-6065
埼玉県ふじみ野市苗間40-39 (旧商工会館)
※展示室は旧大井村役場(苗間34-6 大井小学校東)

企画展 **幾千年の時を超えて**

会期;令和 6 年
11月9日(土)~12月8日(日)

機織りと染織

世界からふじみ野へ



歴史民俗資料館友の会はたおり部会「35周年・綾の会作品展」のコラボ展示として伝統的な織物を作っていた機屋である谷新太郎家の看板などや小坂部忠寿家の賞状を借用して紹介するとともに機織り^{はたお}関連用具を展示し、再現品の機屋や古代からの機織り、染織の歴史を解説しました。

谷新太郎家資料展示風景
谷新のはっぴ、所沢織物同業組合看板、『所沢織物』誌、所蔵^{しま}縞帳など貴重な資料をお貸しいただきました。

※研修室では、11月19日(火)~24日(日)「35周年・綾の会作品展」が行われ、上福岡歴史民俗資料館友の会はたおり部会の指導のもとになった上福岡地域の機屋や古代からの機織り、染織の歴史を解説しました。※研修室では、11月19日(火)~24日(日)「35周年・綾の会作品展」が行われ、上福岡歴史民俗資料館友の会はたおり部会の指導による機織り体験を行い、市内外を問わず、多数の機織りに関心を持つ方に御来館頂きました。

無機台型(原始)織機展示風景 (※「富士見市からむしの会」のご好意による。)





小坂部忠寿家の賞状展示風景

埼玉県内の共進会のみならず、明治 43 年に群馬県で行われた一府十四縣聯合共進会、大正 11 年の平和記念東京博覧会、昭和 3 年に別府市で実施の中外産業博覧会及び秋田県で行われた国産振興特産工芸品展覧会での出品で受賞し、高い技術を示したことがうかがわれます。

資料紹介 1 「箕輪染工場の『染物通』帳」

明治後半～昭和初期の上福岡地域では、機屋とともに増田林蔵、神山エイ、箕輪奥之丞^{けんれん}の三軒の染工場(紺屋、コウヤ)がありました。そのうち、箕輪染工場との染糸の取引を示す昭和二年の『染物通』帳です。当時の紺屋の資料は少ないため、非常に貴重なものです。※この資料は「機織りと染織」展のために谷家から一時寄託を受け、現在は返却しています。



(表面)



(裏面)

新資料発見！資料紹介 2 「所沢織物工業組合組合員名簿」

上福岡の機屋については、江戸時代末には、大字川崎の日出間家、明治 14 年以降は、『内国勸業博覧会出品目録』で、福岡、中福岡でも織物生産者がいたこと明治時代中葉段階では、『勸業上申進達書編冊』、諸家文書によって駒林にも機屋があったこと、また大正 12 年には、『埼玉織物同業組合名簿』で旧上福岡地域全域で機織りが行われていたことが平成 11 年実施の『第 15 回特別展 はたおりと人々のくらし』図録で明らかになっていました。しかし、「機織りと染織」展準備の段階で、谷新太郎家から「所沢織物同業組合」の看板、所沢織物同

岡谷組合員氏名工場名
 本新嘉一
 開新嘉一
 太太郎
 郎郎一
 所澤織物工業組合

所在地 埼玉縣入間郡所澤町大字所澤六二〇
 理事長 平岡仙太郎
 電話番號
 入間郡福岡村大字駒林二四二
 入間郡福岡村大字駒林二三六
 入間郡福岡村大字駒林一一一

製織綿布ノ種類
 廣巾綿布、着尺地
 廣巾綿布、着尺地
 着尺地

業組合の理事長の平岡徳次郎商店との取引書類をお預かりすることとなり、駒林と所沢の機屋との関係の深さが推察されます。

所沢織物同業組合は、武蔵織物同業組合が大正 10(1921)年 11 月に改名してできた同業組合ですが、その時点では、谷新太郎家は、前述のように埼玉織物同業組合に加入していました。何らかの事情で所沢織物同業組合から材料を購入したり、仕事を請け負ったりなどの取引が発生し、昭和 10(1935)年 11 月に同業組合が工業組合に改組された際にも、ひきつづき組合員として残ったと考えられます。この工業組合員名簿は、『日本綿織物工業組合聯合会所属組合組合員名簿』(昭和 13 年)に含まれていたもので、機屋の廃業と共に忘れ去られていました。谷嘉一家と岡本関太郎家の名前もあり、昭和初期のふじみ野市の機業史の一端をうかがわせる貴重な史料です。

上福岡の織物生産者一覧(敬称略)

年代	川崎	福岡	中福岡	福岡新田	駒林
江戸末期	日出間寅次郎				
明治5年	日出間太郎吉				
明治14年		玉田寅松、富田佐太郎、山崎丹蔵	玉田仲次郎、富田浅右衛門、富田宗次郎、宮寺辰五郎		
明治15年	土屋源八、日出間喜太郎、日出間太郎吉				
明治20年					小坂部兵助
明治23年		内田与三郎、小暮惣次郎、吉野円吉、吉野登三郎			小坂部兵助
		小暮惣次郎、谷田留吉、吉野円吉			小坂部兵助、永倉定四郎
明治30年	日出間太郎吉				
明治36年					谷郷太郎
大正12年	土屋奥蔵、土屋治平、日出間三郎右衛門、原田宇佐吉	榎本光之助、香取甚之助	小坂部與助、富田鍋太郎	蓑輪光之亮、柳川竹之助	小川吉太郎、小坂部兵助、鈴木治司、鈴木義古、関根豊蔵、関根峯蔵、谷新太郎、谷清、永倉清蔵
昭和13年					岡本関太郎、谷新太郎、谷嘉一
昭和期			小坂部與助		岡本六郎、小坂部利助、鈴木治司、関根豊蔵、谷郷太郎

新たに判明した部分(令和 6 年 11 月「機織りと染織」展準備中に判明)

所沢織物工業組合組合員名簿(部分)『日本綿織物工業組合聯合会所属組合組合員名簿』(昭和 13 年)所収(国会図書館デジタルコレクションより)

企画展

会期;令和7年
4月26日(土)~6月8日(日)

日本の藍染め
世界の染織2

資料館では毎年、上福岡歴史民俗資料館友の会はたおり部会との共催により藍染めの体験学習と関連展示を開催しています。上福岡歴史民俗資料館友の会はたおり部会では、ふじみ野市内の職人が生み出した織物の再現品や地域の文化財や伝統産業にちなんだタペストリーを作る活動をしています。今年度はその作品とともに、アフリカ、インドネシア、中国貴州省、西アジア、古代ナスカの織物を紹介しました。

1 階の展示

入口右手に中国南部(貴州省)の端石(かかといし)を使用して光沢をつけた藍染めに刺繍をほどこした染織品、中世展示コーナーを半分入れ替えて西アジアの染織品を展示した。説明文に伴って藍(青色染料)を採取する植物一覧を紹介しました。

- ① プイ族の衣装(中国・貴州) 個人蔵
- ② ミャオ族のおぶい帯(中国・貴州) 個人蔵

アナトリア、イランの染織

アナトリア(トルコ)、イランに住む遊牧民は、それぞれ同じ信仰をもち、天然資源を共有し、自治、自衛のための伝統的集団であるという性格から、他の集団と区別するために独特のモチーフ、記号、シンボルマークを使うようになり、必然的に織物はその媒体となっていきました。たとえば、「娘」、「男」、「既婚女性」、「子だくさんの女性」、「やもめ」などを表すモチーフは種族ごとに異なります。

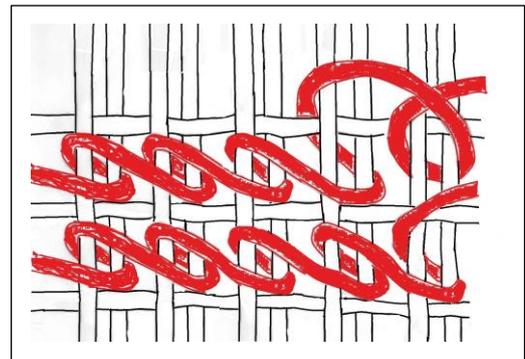
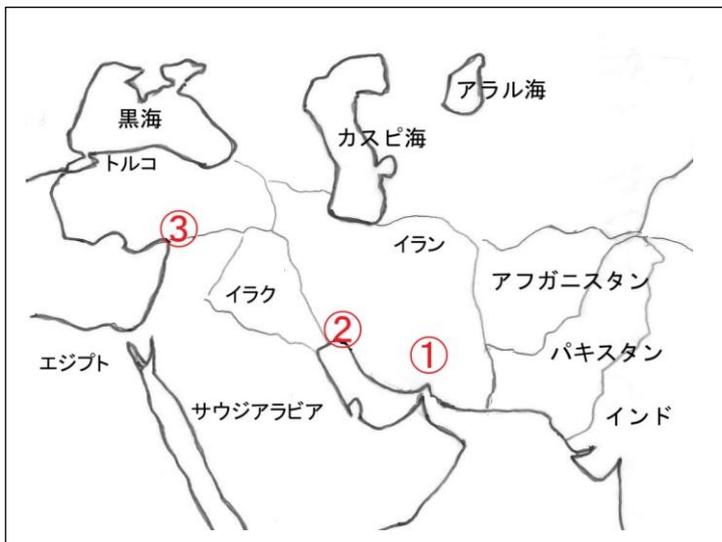
なお、アナトリア、イランに住む遊牧民の羊毛を織り込んだ独特なモチーフを持つ織物は、キリムと呼ばれ、狭義では平織のものを指しますが、広義では羊毛を用いた袋物を含む独特なモチーフを持つ織物一般を指す場合もあります。織物にはヤギや羊などの毛を洗って紡ぎ、糸状にして染めてから織り込みます。使用する染料は20種類に達し、色を混ぜることもありました。



プイ族の衣装とミャオ族のおぶい帯

インドアイ系	リュウキュウアイ系	タデアイ系	大青(タイセイ)・ウオード系
マメ科	キツネノマゴ科	タデ科	アブラナ科
灌木	低木状の多年草	一年草	越年草
インド、インドネシア、台湾、メキシコ、グアテマラ、アフリカ中央部など	タイ、ミャンマーの山岳部、台湾、ブータン、沖縄、小笠原など	日本、中国	ヨーロッパ、シベリア、モンゴル、中国北部、モロッコ、北海道など

藍(青色染料)の種類



スマック織りの模式図

西アジア染織地図

① アフシャール族の塩袋

岩塩を運搬する袋で、家畜が勝手に舐めないよう口が狭くなっている。素材は羊毛。中央の斜めの文様はムルマツ(Muhrmat)とよばれるデザインであり、周囲を囲むモチーフは羊の角を様式化したものです。

② バクテイアリ族の塩袋

約 80～90 年前に制作。スマック織りで、底部はパイル織り。中央部には、ドラゴンのモチーフ、その周囲を囲むようにボテ(ペイズリー)のモチーフが、丹念に織り込まれています。織りで



③ アナトリアのマラティヤでクルド民族によって織られたチュワル(日用品袋)の一部

約 90 年～100 年前のものであり、全て草木染めのチュワルが使えなくなったため、一部を切り抜いて売り払ったもの。素材の大部分が羊毛だが、一部白い部分は綿が織り込まれています。

2 階の展示

藍の栽培と生産、染め方、古代アンデス(ナスカ)織物、インドネシア織物の展示 埼玉県立歴史と民俗の博物館より借用した藍の栽培、生産と藍玉づくり、糸染めの工程など紺屋の行う貴重な写真をお借用して展示しました。また古代アンデス(ナスカ)織物 3 点、インドネシアの織物 2 点の展示を行った。5 月 28 日の「大人の藍染体験教室」で展示解説を行いました。

しほ 絞り布(スウェラシ島、トラジャ族) 個人蔵	パラカス文化(初期ナスカ); 紀元前 1 世紀～紀元後 1 世紀/ ターバンの一部 個人蔵
たてかすり こしまさ 経縞の腰巻(チモール島) 個人蔵	ナスカ文化; 4～6 世紀/ 絞り貫頭衣 1 点、腰巻もしくは肩掛け布 「舌出し神」1 点 個人蔵

アフリカの染織

アフリカの染織品は、西アフリカでみられる藍染め、マリなどでみられる^{どろ}泥染め、コートジボアールからコンゴにみられるラフィアヤシの繊維を用いたラフィア布、ガーナのアカン族のアディンクラ、祝い事で使われるケンテなどが挙げられます。ナイジェリアでは、ヨルバ族の「アディレ」のほかイボ族の秘密結社のしきたり、ことわざ、物語、暗号などを動物や絵文字のような文様をつかって表現している「エクベ結社」の藍染めが知られています。マリの泥染めは、一般的に「ボゴランフィニ」といい、まず布をシカラマの木の葉をすりつぶしてできた黄色い染液につけてから乾燥させ、鉄分を多く含んだ川の泥を用いて文様をつけた後、再び乾燥させる。白くしたい部分は、ピーナツとキビのぬかを混ぜた脱色剤を塗る方法、シアバター^{しゃふつ}の木の実をつぶして煮沸して水面に浮かんだ脂肪^{しぼう}などを原料とした一種の石鹼と漂白剤などを混ぜたものを塗る方法のいずれかで文様を浮か立させる。コートジボアールのセヌフォ族は、黒、赤、黄の染料を用い、くくり絞り、縫い^ぬ絞り^{しほ}などの技法を用い、意図的にしわを伸ばさない個性的な布を作っています。アカン族の葬儀などに使用されるアディンクラクロスは、ひょうたんの外皮を使ってさまざまなシンボルのスタンプを押印してメッセージを布に表現しています。



アフリカの染織コーナー(前期展、二階民具収蔵庫前)

①バマナ族の泥染め布(マリ) 個人蔵

マリのバマナ族の女性たちによって作られる黒地に白抜きの幾何学文様が繰り返し施される布です。マントのようにはおったと思われる。ンカラマ(シクンシ科の樹木)の葉でつくった黄色い染液(タンニンを含む)に布をつけて、濃い黄色に染まった布を乾かし、一年以上寝かせた鉄分を多く含んだ川の泥を筆やブラシにつけて文様を描くと、泥に含まれた酸化鉄がタンニンを含んだ酸と反応して黒色の模様になります。文様を描いて乾燥させた布は、水洗いした後再び黄色の染液に浸す。白く脱色したい部分には、ピーナッツとキビのぬかをまぜたものや苛性ソーダ(水酸化ナトリウム)溶液を塗って日にさらす。最後に石鹼で洗うと脱色剤を塗った部分は、白くなります。

ボゴランフィニは、若い女性や猟師など危険にさらされる機会が多い人たちが身に着けると考えられ、布の黒く染まった部分が、悪霊を吸い取り、曲がりくねった文様が外敵を閉じ込めると考えられてきました。

②ドゴン族の藍染め(マリ) 個人蔵

ピーナッツとキビのぬかをまぜたものを防染剤として、手書きで塗った後に藍染めをしたと考えられます。パーニュという上着又は子どもを抱くための布として使うものと思われます。

③ナイジェリア・イボ族のエクベ結社の藍染布(ウカラ) 個人蔵

エクベ結社の構成員が儀式であらかじめどのような文様をつけるか指示して、しきたり、ことわざ、物語、暗号などを藍染めを行うコミュニティとなっている町に発注し、腰巻や儀式の際の幕屋の布に使用しました。

④ディダ族のラフィア絞(しば)り布(コートジボアール) 個人蔵

コートジボアールに暮らすディダ族は、ラフィアヤシの葉から繊維をとり、儀礼用の上着、ふんどしやスカート、マント、ハンカチなど作っている。低木の根から黄色い染料をとって地染めし、絞りをしてから、赤や黒の染料で染める。黒は、マンガンと葉の混合物かあるいはタンニン系の植物染料と泥染め用の染料を用いている。黄色地に赤、その次に黒といった順番に染める。黒が赤にかぶさると結果として赤みを帯びた茶色になる。

⑤マリの藍染めクッションカバー 個人蔵

泥染めのモチーフを使ったクッションカバーで、複数回にわたって染めている。白っぽい部分は、ピーナッツとキビのぬかをまぜたものなどを使用して防染したものと考えられる。



アフリカの染織コーナー(後期展、二階民具収蔵庫前)

①マリの泥染め布 個人蔵

マリの地域を問わずに見られる泥染め布。ンカラマ(シクンシ科)の葉でつくった黄色い染液に布をつけて、濃い黄色に染まった布を乾かし泥をつけた竹筆かブラシ用いて絵を描き、再び乾かしてから黄色の染液につけて布を乾かし、鉄分を含んだ泥を塗り、干した後、川で洗い強く絞って乾かします。

再び黄色の染液につけて文様を泥でなぞる。白く脱色したい部分は、カリテ(シアバターノキの実)をつぶして煮沸して水面に浮かんだ脂肪とセゲと呼ばれる灰汁を煮詰めてできた物質などを混ぜてつくった一種の石鹼の水溶液に、市販の漂白剤やカルキ剤を1/4混ぜたものを塗って、白くしたい部分を漂白します。

②藍染めを用いた経緋(アショケ、ヨルバ族、ナイジェリア) 個人蔵

15~16世紀ごろにマリのワンガラ族というイスラム商人から伝えられた綜紵が二重になった機織り機で男性の職工によって織られた幅10cmの布をつなぎ合わせたものでアショケと呼ばれる。染められた経糸を、染まっていない緯糸に織り込んで、経糸の文様が布の表面に現れる。アショケ布は、つなぎ合わせて男性用の長衣やズボン、女性の巻衣、ショール、ターバンやそれらとセットになった衣服に用いられました。

③ドゴン族の藍染め(マリ) 個人蔵

ピーナッツとキビのぬかをまぜたものを防染剤として手書きで塗り、一部絞りを行って、藍染めを二回行ったと考えられます。裏面には、絞り痕のみがみられます。パーニュという上着か子どもを抱くための布として使うものと思われる。

④アディンクラ・シンボル付き藍染め布(アカン族、ガーナ) 個人蔵

アディンクラ・シンボルとは、発案者であるナナ・クワジウォ・アジヤマン・アディンクラ(Nana Kwadwo Agyemang Adinkra)の名に由来し、そのシンボルは、ひょうたんなどの堅い外皮に文様を彫り込んでスタンプとして使われます。そのスタンプが押された布をアディンクラ・クロスと呼ぶ。アディンクラ・クロスは、喪服としての使用が好まれる傾向にあります。葬儀や悲しみを示す場面で使用するため、一般的には、赤や黒を重ねて暗い色調になるように染め、縦方向に赤、黒、黄色、緑の糸によってつくられた刺繍によって分割します。これにひょうたんなどの堅い外皮に文様を彫り込んで作ったスタンプを押して文様を現します。展示している布は、藍を使用して濃い色に染め、暗い色調にして乾かし、改めてスタンプを押しています。シンボルで明確にわかるのは、戦闘のヒーロー、勇敢さ、武勇(Kwatakyé Atiko)をあらわすものですが、ほかに平和、協調をあらわすシンボルに似たもの、練達、熟練をあらわすと思われるシンボルに似たもの、変化をあらわすと思われるシンボルに似たものが押印されています。

大正～昭和初期の縞帳しまちょうからの再現品、ほうきの文化タペストリー

ほうきを中心とした特産品をぬい上げた「ほうきの文化」のタペストリー、小坂部家と谷家の縞帳(布のデザイン帳)からの再現品を展示した。

再現元の縞帳	時期	点数
おさかべ 小坂部忠寿家縞帳	大正 6 年	1 点
	大正 7 年	1 点
	大正9年	1 点
	大正13年	1 点
ごうたろう 谷郷太郎家(湖月)縞帳	昭和 2 年	1 点

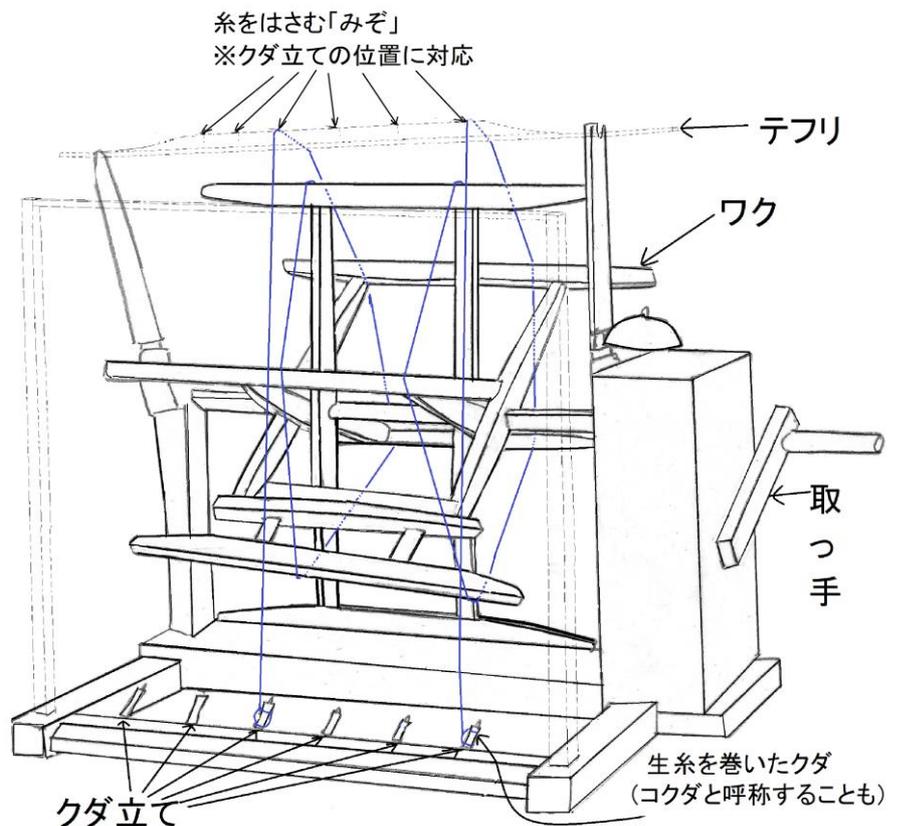
再現品一覧



再現品、機織り用具、タペストリー展示風景

資料紹介 3 「ヒャクマワシ」

まゆまゆ繭から引いた生糸をまきとってかせ総をつくる道具である。とげのようなものは「クダ立て」といい、生糸を巻いたクダ(木製の管)を立て、把手を回して枠を回転させ、総を巻き返し(=つくっ)ていく。内部の歯車が回転と連動し、100回まわすと鐘が鳴る仕組みである。長さと重さが均一な総を作ることができます。上部には一定の幅に綾を振りながら生糸を総に返すことができる「手振り」がありました。取り外し可能なため、紛失して使用できない状態になったと考えられます。



ヒャクマワシ概念図